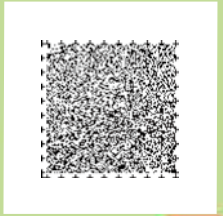




「障害があっても幸せになれる。その方法を活動を通じて皆で探していけたら」と坂下さん

ありが ヒューマン ドキュメント



かごしま言友会会長・看護師

さか した ひで あき

【坂下 秀明】さん

鹿児島市

苦しんだ日々を乗り越えて
自ら選んだ道へチャレンジ

吃音(きつおん)とは言語障害の一つで、「言葉を発する時にどもる」「言葉を流暢ように話せない」など当事者が抱える症状は人それぞれです。外見からはわかりづらい「見えない障害」であるため、他人に理解されにくく、当事者を一層苦しめる一因となっています。

吃音者の自助グループ「かごしま言友会」会長の坂下秀明さん(39歳)が、自身の吃音の症状に気付いたのは小学生の頃。吃音に悩む多くの人と同じように、実は正確な発症時期や原因はわかっていません。からかわれたり真似されたりと、他人との違いに敏感な10代の頃にきつい思いをしました。

しかし、この経験を乗り越えて、診療放射線技師として3年働いた後、「患者さんの直接的なお世話がしたい」と看護師への転職を決意。周囲の支えもあり、看護師として勤めてから10年が経ちました。

吃音とは一生のつきあいかもしれない。でも幸せにはなれる

「自分以外の吃音者のために何かをすることが、自分の吃音と向き合うきっかけになるのでは」と、「吃音ワークショップ」の全国大会に参加したのを機に、2013年4月、かごしま言友会を設立。活動を通じてさまざまな人と接するうちに、「コミュニケーションが図れず心を痛めていたり、社会不安障害など二次障害を発症していた」と、吃音は軽くても見えない部分で深く苦悩している人たちが多くことに気付きました。そして今、医療の世界に身を置くことで新たな知識や人脈を得た坂下さんの看護師としての経験が言友会の活動に役立っています。

言友会の活動は、定例会など情報交換や当事者同士の交流が中心。サマーキャンプなど親子参加可能な行事では、親同士との交流もあります。「会は治療目的ではなく、あくまで当事者同士の集まり。参加しても症状が軽くな



近年、吃音者を描いた映画・ドラマが増え、「環境は変わりつつあると感じます」。理解の輪がさらに広がることを期待しています

る訳ではないけれど、同じ悩みを抱えた者同士が交流することで、心が軽くなれば」と話す坂下さん。ある10代の会員は、「同じ悩みを持つ同世代の友人ができて前向きになれた」と言います。

2年前に参加した「第11回国際吃音者連盟世界大会」では、同じ障害がある人たちと国や言葉を超えて通じ合えるものがあつたと振り返る坂下さん。「今でも吃音がなければ良いなと思うけれど、さまざまな経験や出会いがある言友会の活動のおかげで、今の人生が好きになりました。

障害があっても幸せになることはできる―それを伝える応援団となるために、坂下さんはこれからも地道に活動を続けていきたいと考えています。

かごしま言友会 ～吃音のセルフヘルプグループ～

情報交換や学習会・交流会などを通して、吃音とつきあいながら生活していくことを共に考える。2カ月に1度、定例会を開催。

E-mail kagoshima.genyuukai@gmail.com

